

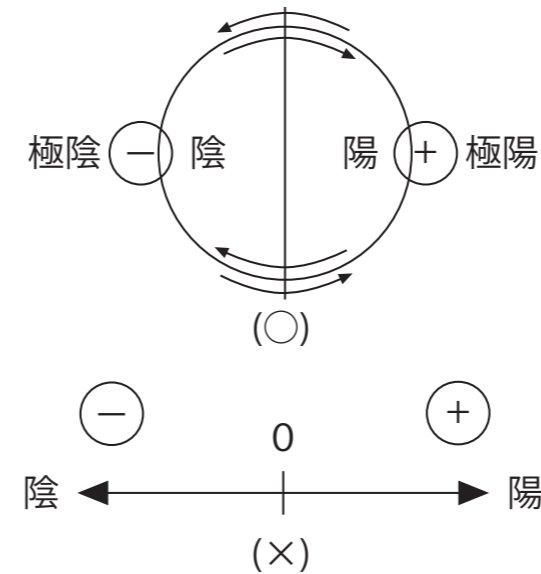


1月21日(土)  
「カンブリア宮殿」収録の様子  
(テレビ東京天王洲スタジオにて)

中国では、古来より物事を二律対比で表現する知恵を持っていました。

陽と陰  
昼と夜  
善と悪  
幸と不幸  
といった対比です。

そして、「陰極まれば陽となり、陽極まれば陰となる」といった言葉にも有る様に、これらの二極はひとつの円のサイクルの中に有って、極まれば互いに遠くなる直線的要素ではないという考え方は。



この考え方でいくと、有名な「塞翁が馬」の教えの様に、「幸せは不幸の前兆」であり、逆に「不幸は幸せの前兆」という考え方にもなります。

現在の日本は、何かやたらとマイナスの要素だけがことさら大きく取り上げられ行き場の無い閉塞感が重く漂っていますが、これは日本の指導的立場にある人達の視野、思考、そして志のレベルに起因しているのではないのでしょうか。

人口減の問題ひとつとっても、日本は2007年の1.28億人をピークに人口減にはいり、2046年に1億人を割り、2100年には4771万人になるという統計予測が出ていますが、逆に、東京オリンピックが開催された翌年の1966年に日本の人口が1億を超えた事、そして、日露戦争(1904~1905)を戦った頃の日本の人口は4700万人くらいだった事を考えれば、一人一人の日本人の活力さえ取り戻せば、現状の日本をどうにでも出来る人口が、この国にはまだまだ長期的に見て有る訳です。また、年齢構成が逆ピラミッドである事も、理屈から言えばマイナス要素ではありますが、65歳以上が高齢者と考える固定概念を取り去れば、実質的な現役世代の層は広がる訳です。

そもそも、人間にとって生涯現役が本来の姿ではないでしょうか。

実際、65歳以上の人で自分は老人であると思っている人は少ない筈です。

加齢とともに身体上の障害は起こり易くはなりますが、65歳を過ぎても心身共に元気な中高年の活躍の場を増やしていく社会とすると共に、我々中高年も、若い世代と共に生涯現役の気概を持って日本を活力有る国家にしてゆこうではないですか。

下り坂に向かう兆しは最盛期に現れ  
新しきものの胎動は衰退の極に生ずる

という言葉があります。

今日の日本を衰退と言うならば、その予兆は既に1960~1980年代にあった筈ですし、また、衰退と言われる今こそ、新しい胎動がどこかで必ず起こっている筈です。

ただ、大多数の人達はその事に気づいていないだけなのではないのでしょうか。

今こそ、日本人としての気概を持って、皆で日本を活力ある国へ再生しようではありませんか。

元気を出して！！